J. Fac. Appl. Biol. Sci.,
Hiroshima Univ. (1997), **36** : 101～113

畜産物流通構造の成立と再編成
――豚肉を研究対象として――

王　良原*・三國　英實**

広島大学生物生産学部，東広島市 739
1997年10月31日　受付

要　旨　今日の農業生産は，高度に発達した資本主義的生産様式に包摂されることを余儀なくされた。農産物はその生産過程と生産物の特質により，農産物の商品化，すなわち，生産物の価値実現過程において，商業資本の役割は重要である。農業生産のなかでも，畜産部門は他の農産物との相違から，流通構造は以下の要因に規定される。すなわち，第1に，生産物の規格化及び標準化が不可能である，第2に，飼料に大きく依存する迂回生産である，第3に，整形加工と分割販売を必要とする，第4に，生産長期性による不利な資金調達，第5に，ふん尿処理にかかる費用は生産コストを増加させる，などである。したがって，商業資本の機能のうちに，とくに資金供与，整形加工，保管の3つの機能は畜産の再生産過程における役割は他の農産物より大きく，畜産物の流通構造にも強い影響を与える。豚肉を具体的な研究対象に実際の流通過程を見ると，生産，集出荷，と畜，仲継，分散の5つの段階が存在することが分かる。前期的商人資本はこれらの諸機能を掌握することにより，閉鎖的市場のもとで豚肉流通を支配した。これに対して，市場の近代化は主として国家の市場介入や，生産者と消費者の組合運動により，従来の閉鎖的，独占的市場を公開，公正，自由競争の市場に導いた。しかし，加工型畜産と畜産インテグレーションの急速な進展により，少数の大規模資本による寡占的競争が強化され，豚肉の流通構造も再編されつつある。その結果，第1の生産基盤の脆弱化，第2の集出荷の不透明化，第3の公的と畜施設の遊休化，第4の卸売市場の機能後退，第5の小売秩序の喪失，などの解決すべき課題が提起されている。
キーワード：資本主義，資本循環，価値実現，商業資本，迂回生産型，整形加工

緒　　言

自給自足を唯一の目的とする生産方式のもとでは，農業生産は単なる自家消費のためにあり，その生産物は決して商品として見なされない。しかも生産から最終消費にいたるまでの段階は，商人の媒介を要しない自給経済の範疇に帰属する。また，このような自給経済の開始は農業生産分野からである。なぜなら，農業は商品経済が出現するよりはるか以前から営まれ，人類の生存にとっての必須部門として自給経済を基本としていたからである。その後，技術と生産力の発展につれて，やがて自給経済は商品経済に転化したのである[1]。しかし，農業生産分野のみならず，工業分野においても同様な転化が進展したが，むしろ工業での資本主義への転化の速度，範囲，規模は前者を大幅に上回り，産業資本としての性格と形態を固めていった。さらに，工業分野での資本蓄積の強化，資本の集積，集中が進んだ結果，独占資本が形成され，これが社会的総資本への主体的影響力を強めるようになった。

農業生産の種類は極めて多数多様であるが，なかでも畜産物は他の農産物とは異なって，動物性たん白質と脂質をたくさん含んでおり，人間にとっては健康な体を維持するための重要な食料品である。このような特徴を持つ畜産物の消費者への安定供給が保てるよう，畜産物の流通構造を明らかにし，そのなかに存在す

*広島大学大学院生物圏科学研究科
**広島大学生物生産学部
1）臼井晋「農業市場問題の所在」臼井晋，宮崎宏編著『現代の農業市場』ミネルヴァ書房，1990年，p 2。

る問題の解決方法を見つけなければならない。とはいっても，今日の畜産物流通は資本主義のもとでの流通過程に囲い込まれており，商品経済の一般理論に影響を及ぼされている。したがって，畜産物流通の構造と問題を解明するためには，これまでの商業理論や流通経済理論に依拠して把握する必要がある。

そこで，本研究は以下の課題を研究目的に設定する。まずは，資本主義のもとでの流通過程と商業資本の形成理論をふまえて，農産物の流通構造を把握する。次に，畜産物の流通構造を規定要因の分析によって解明する。さらに，豚肉を具体的な研究対象として取り上げ，実際の流通構造の近代化過程と課題を明かす。

Ⅰ　農産物の流通過程の成立

1　資本主義下の流通過程

増殖を目的とする資本主義的生産のもとで，産業資本の運動は G（貨幣）－ W（商品＝労働力，生産手段）...P（生産要素）...W'（商品＝生産物）－ G'（貨幣）という形式によって，絶えず増殖を図るために循環運動を続ける。資本家は価値の自己増殖のため，このような資本の循環過程を実行しなければならない。この循環運動において，資本の存在形態は3段階の転換過程で繰り返し，資本蓄積の拡大が進展する。産業資本の循環における資本形態の3段階転換とは，貨幣形態から生産資材，手段，労働力などを含む生産要素の形態へ，生産要素の形態から商品形態へ，商品形態からふたたび貨幣形態へと順次に転換するという循環過程である。この限りでは，産業資本の運動は貨幣資本，生産資本及び商品資本という3つの循環形態の統一体であり，競争する個別諸資本は意識的な主体として，この3つの循環形態をとっては脱ぎすて，価値の自己増殖という目的を遂行する[2]。貨幣形態として存在する資本は価値増殖を求めるために，その基本条件としての生産資材，手段，労働力といった生産要素を，商品として資材市場や労働市場からそれぞれ購入しなければならない。したがって，この過程における資本は貨幣形態から生産要素の形態への転換であり，その本質は購買運動といえる。生産要素が揃った段階において，労働力の働きと生産機具の稼動によって，消費者にとって使用価値のある商品が作られる。このような生産過程に際し，生産要素の形態となった資本は本来の価値に，価値増殖の意味として剰余価値が付加されねばならない。要するに，この過程において，生産要素の形態は本来の価値に剰余価値が新たに融合することによって商品形態に転化する。このため，生産運動をこの過程の本質としてとらえることができる。商品形態となった資本は今度，資本の循環過程の円滑な続行を維持するために，貨幣形態に転換しなければならない。いいかえれば，商品として販売されねば生産過程で作られたものはただの生産物となり，なんらかの使用価値も表現できないのである。したがって，商品形態の資本は商品実現を通して貨幣形態の資本に転換する，という過程の本質を販売運動と見なすことができる。総じて，すでに見てきた産業資本の循環運動のうち，G－W は購買運動，W...P...W' は生産運動，W'－G' は販売運動と，各段階の本質を説明できる。

自己増殖を目指す産業資本の循環運動の総過程においては，価値増殖の生じる生産運動がもっとも主要な位置にあることはいうまでもない。こうした価値増殖を遂行する生産過程に対して，購買運動と販売運動との2つの段階においては，貨幣を媒介とする商品の所有権のみが交換され，価値も剰余価値もまったく形成されない。いわば，売買運動の段階は実は1つの流通過程である。このような流通過程の概念は2つの側面から解釈されている。すなわち，広義として流通過程は資本の形態変換ないし循環運動の過程であるのに対して，狭義の流通過程は売買過程だけとしてとらえられる[3]。資本の形態変換まで流通過程の概念を果たして拡大することができるかどうかの論議はともかく，ここでは，狭義概念を採用し，流通過程を商品が生産者の手から消費者の手へと移動すると同時に，貨幣が買い手から売り手へと移動する過程としてとらえる。この概念に視点をおくこととすれば，資本の総再生産過程を直接的生産過程と本来的流通過程の2つの段階に整理することができる。すなわち，直接的生産過程とは文字通りの生産運動の過程であるが，対立的なものとして，本来的流通過程は購買と販売の両運動の段階を包括しているということである[4]。直接的生産過

2）阿部真也『現代流通経済論』有斐閣，1984年，p 36。

3）字高基輔，副島種典訳ローゼンベルグ『資本論注解』，第三分冊，青木書店，1962年，p 19。

4）長谷部文雄訳『資本論』第三巻，青木書店，1954年，p 385-386。

程においては価値増殖が行なわれるので，産業資本の主な目的である資本蓄積にとっては，この過程がまさに産業資本運動の主要部門である。他方，本来的流通過程は産業資本運動の補完部門として商品実現と再生産準備，換言すれば商品の販売と購買の効率的進行を推し進めるのである。とくに，商品価値が商品のからだから金のからだに飛び移ることを商品の「命懸けの飛躍」[5] と称される商品の販売が失敗すれば，つまり，生産過程を経て商品形態に包摂された2つの価値が資本家の思う通りに貨幣形態に還元，転換されなければ，資本の増殖による商品の再生産は維持できなくなる恐れがある。当然のことであるが，資本の循環過程の中断は，商品所有者である資本家には大きな打撃を与えるだけではなく，社会の総資本にとっても決して好ましいことではない。したがって，資本の循環過程ないし社会的総資本の運動において，商品販売がいかに重要かつ困難であることは極めて明白である。

2　流通過程と商業資本との関係

価値増殖を目的とする資本の循環運動のなかに，価値増殖の創出という積極的性格をもつ生産過程に対して，価値を形成せず，単なる商品資本から貨幣資本への形態変換を媒介する流通過程は消極的性格しか受け止められないであろう。確かに，流通過程としては，その内容は単なる貨幣資本と商品資本の形態間相互変換，または，貨幣と商品の所在位置の交換にすぎない。しかし，すでに指摘したように，資本の循環過程に際して，資本が資本としての機能を発揮するために，まず資本が生産過程と流通過程を順次に間断なく通過し，たえずその形態を変換しなければならない。いいかえれば，資本が貨幣資本あるいは商品資本として現れる流通過程が存在しなければ，資本の循環運動は中断されてしまうことになる[6]。したがって，流通過程の機能は2つの側面から理解できる。すなわち，資本家個人の資本循環運動にとって，流通過程は商品実現によって資本増殖の再生産循環の運行を促進する機能である。また，社会的総資本の運動にとって，流通過程は供給と需要の両側，つまり生産者と消費者を結ぶ媒介機能であるといえる。

マルクスによれば，流通過程の構造は流通資本，流通時間，流通費用という3つの要因に規定される。流通資本は貨幣資本または商品資本が流通過程に束縛される資本の存在形態である。流通時間はこういった流通過程に束縛される資本が流通過程に滞留する時間を指す。流通費用は流通過程における貨幣と商品の形態間相互変換のために，必要な労働や資材に支出される費用である。したがって，これらの要因は互いに影響しあい，関連しあうものであるが，とくに流通時間が果たす役割は大きい。すなわち，流通資本の量的サイズまたは資本全体に占める割合は各資本形態の回転時間，いわば流通時間に強く依存する以外に，流通過程に必要な流通費用も流通時間の長さによって制御されるのである。このような関連性からいえるのは，流通過程はいかに資本の循環運動にとって不生産性，消極的などの性格があっても，資本家が流通過程を短縮することができると，資本の循環運動はもちろん，剰余価値の貨幣への実現による資本の蓄積をもいっそう加速できることである。いいかえれば，流通時間の消極的な制限による資本の価値増殖の積極的な進展が進められるのである。

こうした流通過程のなかでも，価値増殖のために生産要素を準備する段階における購買行動に比べれば，商品実現のために商品資本を貨幣資本に転化する段階における販売行動は，はるかに複雑である。とりわけ，たとえ貨幣が生産要素として投下され，その生産過程も無事に終了したとしても，生産された商品が販売されねば次の生産を続けることは到底ありえない。そしてこの認識を踏まえてこそ，資本家にとって販売段階が有する深層の意味が浮かび上がる。すなわち，販売を通して，貨幣形態で投下された資本価値がふたたび貨幣形態に還元するのみならず，生産過程で創出された剰余価値も同時に貨幣形態で実現されるのである。したがって，販売に要する時間は流通時間の一部分だけではなく，剰余価値の実現に多大な影響をもつ一部分でもある。なぜなら，そもそも販売過程は剰余価値実現のための過程であり，商品が一定の時間内に販売されなければ，この商品に含まれている本来の資本価値も，創出された剰余価値もみな失われる危険にある。そこで，「資本の人格化としての資本家にとっては，価値増殖のためには流通時間，なかんずくその主要部分をなす販売時間をできるかぎり短縮することが必要になってくる。そしてまた，この流通時間短縮の必要

5）資本論翻訳委員会訳『資本論』第一部，新日本出版社，1991年，p 180。
6）鈴木武『流通経済論』同文舘，1997年，p 67。

から，資本間分業としての商業資本が生じてくるのである[7]。この商業資本は産業資本の循環運動の形式とは違って，商品流通そのものを示すG（貨幣）－W（商品）－G'（貨幣）という特殊の運動形態に基づいて，資本循環を進めるのである。

この商業資本の介在により，散在する多数の買い手に対する多数の売り手による販売の偶然性はある程度克服されるため，売買の社会的集中が形成するのである。またこの点において，社会的空費である流通費用の節約と同時に，迅速な商品販売による個別産業資本の循環運動の加速が同時に達成されるのである。いわば，「商業資本の自立化」[8]は社会的分業による専門化の利益が要求される結果であり，また産業資本の流通過程を代位担当する特殊資本の成立でもある。それによって，こうした商業資本のなかでも商品資本と貨幣資本の形態変換に対応するために，商品取扱資本と貨幣取扱資本という2つの分化が形成し，それぞれの流通活動から形成された商業機能[9]を果たしている。当然，商業資本は取扱うものの価値にさらなる数量化された機能提供の報酬を付け加えなければ，原則として価値増殖がしない等価交換の循環方式であるG－W－G'の矛盾を乗り越えることは絶対ありえない。具体的にいえば，非生産的な流通活動のなかに費やされる流通費用を，その報酬で補填しなければ，商品流通は循環にならないということである。このことから，商業資本家である商人は自ら行なう流通活動そのものを商品化し，こうした商品の価値実現による貨幣形態への転換，いわば流通機能の報酬を商業利潤として受け取ることがうかがえる。

これ以上商業資本に対する分析に立ち入ることは莫大な紙面を要するだけではなく，本研究の主な目的でもない。したがって，以下ではこうした資本主義のもとでの流通過程における農産物の流通過程にもっぱら照準を合わせ，分析を進めていく。

3　農産物の流通構造の展開

前に述べたような社会的分業の結果として，現れた商業資本の自立化による産業資本の流通過程を代位担当する流通過程は，産業の技術革新の展開により大きく変容を強いられた。とくに産業側は過剰生産から生じる販売圧力を，商業資本の持つ流通組織の高度な効率で解決せざるをえなくなり，商品実現をめぐる産業資本と商業資本との相対関係は大きく変化する。市場での優位性を維持できる産業の場合は，資本蓄積の拡大に基づき，産業寡占による流通支配を形成することが可能である。そのため，流通組織の系列化のもとで，産業資本なりの配給機構が成立するか，あるいは商業資本の排除による産業資本の直接販売が進展する。他方，商業資本が市場において優位性を掌握する場合は，商品販売に関する専門技術をテコに商業寡占を構築することもありうる。ここで問題となるのは，このような商業資本の自立による流通過程は，どのように農産物の流通過程として表現されるのかということである。

前述した産業資本の循環運動は，農業生産における資本の循環運動も同じ形式のもとに進行している。したがって，農業の再生産循環は概念的には次の基本図式で示すことができる[10]。

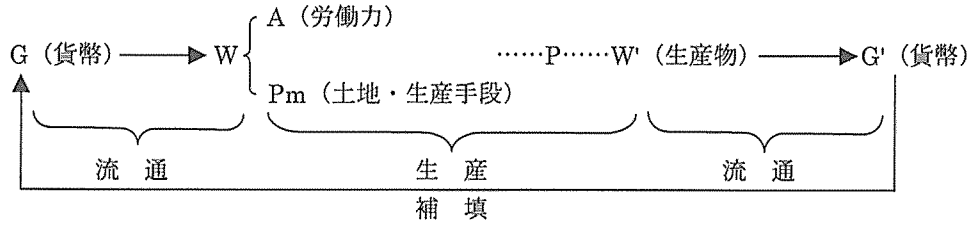
これを見ると，W'－G'は農産物の販売を主たる目的とする農産物の流通過程に当たり，農産物市場を構成することが分かる。この市場において，生産された農産物が消費者に販売されることにより，生産者は農産物価値の貨幣資本への形態変換のみならず，再生産の維持をも実現できる。したがって，こうした農産物の流通過程は農業の再生産循環の根幹をなしているといえよう。確かに，一見すれば農産物の流通過程は産業資本一般の生産物の流通過程とは何の変わりもない。しかし，農産物の流通過程は農業の生産過程の性質

7）鈴木武，前掲書，p 77。

8）商業資本の自立化に関する見解については，筆者は森下二次也『商業経済論の体系と展開』千倉書房，1993，p 59-63 と阿部真也，前掲書，p 36-37 に依拠するが，反論をも含めて取りまとめたのは，但馬末雄「商業資本論」阿部真也，但馬末雄，前田重朗，三国英実，片桐誠士編著『流通研究の現状と課題』ミネルヴァ書房，1995年，p 11-19 がある。

9）資本主義のもとでの商業機能に関する整理は森下二次也『現代商業経済論』有斐閣，1981，p 30-31 及び鈴木武，前掲書，p 87-111 を参照されたい。

10）臼井晋「農業市場問題の所在」臼井晋，宮崎宏編著『現代の農業市場』ミネルヴァ書房，1990年，p 5-6。



と農産物自体の特質に制約されるところが大きいから，その流通構造，流通組織も特殊な形態をとる。すなわち，農業は「土地生産」「生物生産」であるということによって他の産業と大きく区別される特殊性を持ち，またこの特殊性のゆえに農業は社会的分業において１つの特殊的形態を持つのである[11]。

ここで，まず工業製品に対比して農産物の特質を以下のように整理できる。第１は，生産された農産物の品質の変化ないし腐敗が起こりうることである。第２は，たとえ流通過程に入っても，農産物の質と量の物理的，化学的変化は可能である。第３は，同じ品種でも個々の農産物の品質と重量は均一しがたいことである。第４は，農産物の生産過程に品種，天候，土壌，病害などの客観的条件が及ぼす影響は強いため，生産量と品質は不安定である。第５は，農産物の多くは人間にとって，いのちを営むための欠かせない基本食料である。

次に，工業製品の生産過程に対比して，農産物の生産過程の特質を以下のように整理できる。第１は，農産物生産は土地に依存生産であるため，土地の場所，面積，消費地までの距離など諸条件が生産方式を制限する要因となることである。とくに土地所有の制限によって農産物の価格形成は，工業の平均原理と異なり，最劣等地の農産物の生産価格が市場価格を調整する基準価格となるという限界原理で形成される。第２は，農産物の生産周期は長いため，急増した需要には対応しきれないだけではなく，商品実現までの必要な労働力と資金の確保は困難である。第３は，多数の農産物生産は相対的に小規模であり，地理的にも散在する。第４は，農業生産は小農生産で営まれる場合多く，担い手自らが資本家でありながら，土地所有者，労働者でもある割合が高い。

上記のような農産物の生産過程の特質は，農産物の流通過程に影響を与えたばかりではなく，農産物の流通構造及び市場の特殊性を作り出したのである。すなわち，第１に，農業生産者の小商品生産者的性格により，農産物の集出荷は零細性と困難性を増している，第２に，生鮮農産物の価値実現を確保するために，流通時間の短縮が強く要求される，第３に，農産物は時間の経過でその質的変化をともなうため，商品として価値の向上などのために，低温保存や加工などといった流通時間を延長する手段が講じられる，第４に，農産物生産の質的及び量的不安定性は販売価格の激しい変動を来たすので，円滑な再生産を進めるために，生産者は長期的かつ安定的な販売過程を図らねばならない，第５に，自然条件，気候条件に生産物の成長が左右され，品質も多様性を有するため，その商品化過程で選別，格付けなどの機能が主要となる，などを挙げることができる。

しかし，農産物の市場が広がるにしたがって，このような小商品生産者的農業生産者による細分された小規模な販売は，不可能となる。市場が大きければ，販売は大規模で大量的でなければならないからである。そこで，生産の小規模な性格は大規模な卸売の必要と和解しえない矛盾に陥る。この矛盾は販売の集積によるほかには，解決されえなかった。

こうして，この小商品生産者の零細性と拡大されつつある市場規模との矛盾を解決するものとして，買占人の出現が必然化する[12]。しかも「買占人は販売費を安くし，販売を小規模な，偶然的，不規則なものから，大規模な，規則的なものに転化した。…こうして，商品経済という環境のもとでは，小生産者は，細分された小規模な販売に対する大規模な，大量的な販売の，純経済的な優越性のために，不可避的に，商業資本に

11）田辺良則「商業的農業の展開と農産物市場」川村琢，湯沢誠，美土路達雄編『農産物市場の形成と展開』（農産物市場論大系１）農文協，1981年，p 30。

12）田辺良則，前掲書，p 49。

依存するようになる[13]」というレーニンの論述によっても，農産物の生産者は工業製品の生産者のように市場における優位性，または主導権を握るのは基本的に難しいことが明らかである。したがって，商品経済の体系に組み込まれた農産物の販売過程は，専業化かつ自立化した農産物取扱資本，または商業資本に大きく依存するところとなった。こうして，農産物販売の商業資本への依存を通じて，商業資本家は絶対的な優位性を築き上げた。その結果として，数多くの農産物生産者は商業資本家への従属化を強いられた。

Ⅱ　畜産物流通構造と豚肉流通構造の位置づけ

1　畜産物流通構造の規定要因

基本的に畜産物の生産も農業生産の1部門としてとらえられるが，性格は穀物や青果物に比べると，かなりの相違が見られる。前述の農産物の特質に加わり，以下のような相違は畜産物の特殊要因として，流通構造に大きく影響する。

第1は，畜産物生産における生産物の規格化及び標準化は，動物の個体間の差異により，根本的に不可能である。

第2は，穀物や青果物のように土地を直接利用するのではなく，畜産物の生産は作られた穀物や青果物を餌にして行なわれるのである。このことから，穀物や青果物の生産を1次生産型の農産物生産とすれば，むしろ畜産物の生産を2次生産型，または迂廻生産型農業として考えてよかろう。そのため，餌として使われるものを確保することは，畜産物生産の基本的な条件であり，畜産物の再生産のためには，生産資材として飼料の購入が必要となる。

第3は，穀物や青果物は流通過程において，外観，形態の変化はほとんど起きないのに対し，畜産物は外観，形態の変化なくしては，最終消費者に利用されえないという特質を持っている。また，家畜の体型と販売単価は他の農産物を大いに上回り，消費者の個人消費能力を超過する。これにより，畜産物はある程度の整形加工を経てから，食料品として最終消費者に受け入れられることが可能であり，商品化の円滑な遂行にもつながるのである。

第4は，家畜の成長が遅いことから，一般的に畜産物の生産過程が要する時間は，穀物や青果物より長いことである。いいかえれば，生産の回転率は低く，資本は生産資本としての滞留時間が長引くだけではなく，生産資本の全資本に対する割合も高まる。そうすれば，流通資本の割合は相対的に縮小せざるをえないため，畜産物の生産者は経営資金の調達問題に迫られる。

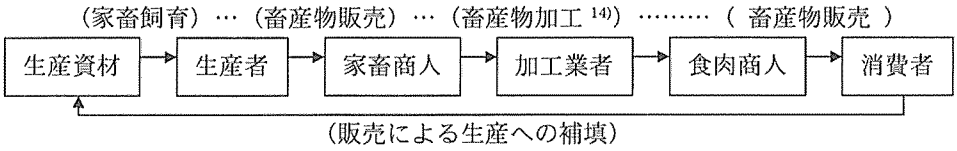
第5は，畜産物の生産過程にはふん尿問題が生じてくることである。家畜は餌を食べると，生体の新陳代謝にともない，自然にふん尿を産出してしまう。市場の拡大に対応するために，生産規模が拡大すればするほど，大量のふん尿の処理問題は必至でる。その場合，大量のふん尿処理に当たり，生産者は必ずしも商品価値に反映も追加もしない処理費用を，生産資本として投下しなければならない。そうすると，畜産物の生産資本はますます膨らむ。畜産生産では，このように生産管理に労働が集中するため，畜産物の商品実現のためには，商業資本に対する生産者の依存度が強められる。

2　畜産物の流通構造

畜産物の流通過程は，生産者によって生産された畜産物が様々な経路を経て，消費者の手に届くまでのすべての過程である。この過程において生産者と消費者との間に介在する様々な担い手は，社会的分業に基づいた段階的な役割を果たし，貨幣を仲立ちにした商品の交換連鎖を結んでいる。そこで，こうした生産から消費までの過程を2つの視点から考察することができる。すなわち，商的流通と物的流通である。とくに後者の視点に立つと，基本的な畜産物の流通構造は次の図形に表示できる。

これを念頭に，より具体的に畜産物の流通構造を説明してみよう。まず，生産者は土地，畜舎，機具などの生産資材のほかに，餌と労働力をも持って家畜の飼育を開始する。一定の時間が経過すると，家畜は食料として利用できる畜産物までに成長する。その時に，生産者は畜産物を販売し，次の再生産への準備をしなければならないので，畜産物を専業化した商業資本の人格化の1つである家畜商人に販売するに至った。し

13）マルクス・レーニン主義研究所訳『レーニン全集』第三巻，大月書店，1972，p 368-369。



かし，卵を除いた畜産物は出荷時点の形態のままで最終消費に持ち込まれることができなく，必ず流通過程で一定の特殊処理を要するのである。例えば，牛乳の場合は殺菌処理や，乳脂肪の調整などが，消費者に利用されるための最低限の必要な処理である。また，肉畜の場合でも，食肉形態として消費者に利用されるために，少なくともと畜，解体は必要な処理である。したがって，これは産地まで回ってくる産地家畜商人が，購入した家畜を一旦加工施設に送り込まなければならない理由である。そこで，と畜場ないし解体・精肉加工を経営する商人の手のよって，家畜がはじめて食肉形態で姿を現すのである。とはいえ，消費者の手元に届くまでに，専業化した商業資本の人格化の１つでもある食肉商人を媒介にしない限り，これらの食肉商品の価値実現は至難なことである。最後に，消費者が畜産物を購入すると同時に発生する生産者への貨幣資本の還元は，こうした畜産物の再生産循環を続けるための生産資本を補填する。もちろん，上記の畜産物の流通構造を畜産物の形態別で分類すれば，畜産物の生体としての流通構造と，整形処理された畜産物の流通構造がある。

畜産物の流通過程に，いわゆる「流通過程に延長された生産過程」という性格を持つ流通活動は，従来指摘されてきた運送，保管だけではない。牛乳加工，と畜，解体，精肉加工などといった「流通のための加工活動」もそれの１つであろう。しかも流通のために行なわれるこのような加工は，畜産物の流通過程にとってむしろ中枢の地位にあり，決定的な流通機能を果たす流通活動である。この加工なしには，全体の流通過程の円滑な進展に支障を来たすこととなる。このように，畜産物流通の場合には，副次的機能のなかでも運送，加工，保管の３つの流通活動はもとより重要な供給機能を果たしているが，とくに加工活動を単なる付随的機能としてとらえるのが適切ではない。

さらに，畜産物の販売過程を仲立ちする商人はこうした運送，加工，保管という流通機能の拡大と強化を軸に，流通構造に対する自らの影響力を向上させた。これにより，流通構造における主体的位置を獲得した商人は，畜産物の流通構造を自らの利益増加につながるように再編しはじめた。農産物のなかに，畜産物のインテグレーションがとくに素早く進展したのもこれによるものが大きい。

ただし，畜産物といっても品目の違いによって流通構造の差異が見られる。また，たとえ同じ種類であっても，素畜の供給，畜産物の生体の集荷，流通のための加工などの諸段階が互い関連しあうので，流通構造はいっそう複雑に進行する。したがって，品目別に畜産物の流通構造を解明する必要がある。

3　豚肉流通構造と位置づけ

前述の如く，養豚生産者が飼育を停止し，商品実現を目指して豚を畜舎から移出する時点は，豚にとっての流通過程の出発点である。それはまた，生産者は畜産物の流通構造を通して豚を販売することの開始である。農産物の流通構造は商品流通構造の一部門であり，そして畜産物の流通構造は農産物の流通構造の一部門を構成する。畜産物の流通構造においても家畜の種類の差異及び特徴により，幾つかの流通形態に分けることができる。一般的に，畜産物は家畜が生み出す生産物と，家畜の生体との２つに分類できる。前者においては卵と家畜乳があり，後者においてもさらに小型家畜，中型家畜，大型家畜の３種類に細分できる。現実に，まれな品目に言及しないとすれば，畜産物の流通構造は卵＝鶏卵，家畜乳＝牛乳，小型家畜＝家禽，

14）ここでいう畜産物加工は消費者がはじめて畜産物を利用しうるように，畜産物流通過程のなかに行なわれる加工活動である。筆者はこのような加工活動を「流通のための加工活動」＝「整形加工」＝ shaping という概念にとらえる。「整形加工」を経た畜産物をさらにバター，粉乳，ハム，ソーセージなどまでに製造する，というような加工活動を「付加価値のための加工」＝「食品加工」＝ processing として前者と区別してとらえる。

中型家畜＝豚，羊，大型家畜＝牛，馬などの個別流通構造の複合体であるといえよう。それに，個々の流通構造はそれぞれの独自の市場とからみあって，それぞれの特殊市場を形成している。ここで，中型家畜である豚を取り上げ，生体形態と食肉形態の２つの流通構造を包含するものとして，豚肉流通構造という表現を使用する。

他の肉用家畜と同様に，豚は生体形態のまま，商品の価値実現のために家畜商人の手に渡され，畜舎から市場に向かって移出される。当然，豚はと畜，解体の処理を経ずには，食肉としての利用価値は現れなく，豚肉としての価値実現はできない。しかも家畜の体型は大きければ大きいほど，家畜商人と消費者の両側にとっては自らの手によると畜，解体，精肉加工がますます不可能となってくるために，専業化した担い手が求められる。したがって，中型家畜である豚は家畜商人の手から，また整形加工の機能を担う加工業者に渡されることになる。こうして，豚の整形加工により，生体から食肉へと転換するという物理的変化をともなうことは，生産者と消費者が結ばれる不可欠な基本要素である。このように，整形加工を経た豚は食肉形態の豚肉となり，加工業者からさらに食肉商人に渡され，最終消費者への販売段階に持ち込まれる。このような社会的分業を通して，豚肉の生産（供給）と消費（需要）の結合が果たされるのである。

Ⅲ　豚肉流通構造の再編成と課題

1　豚肉流通構造の再編成

以上をふまえて，豚肉流通構造を機能別に分けるとすれば，少なくとも次に挙げる諸段階に分けることができる。すなわち，生産段階，集出荷段階，と畜段階，仲継階段，そして分散階段である。こうした５つの段階において，各段階の担い手がそれぞれの役割を十分果たせば，順調な流通構造の構築が期待されるが，実際は必ずしもそうではない。

豚の価値実現過程に重要な位置を占める家畜商人，加工業者，食肉商人のいずれは，自らの価値増殖を追求する商人である。豚肉の段階間の移動にかかる経費を圧縮し，より多くの利益を獲得するために，家畜商人は産地からの集出荷にとどまらず，時にはと畜，解体の機能，時には食肉販売の機能を自らも果たすようになる。また，逆の場合に食肉商人はと畜，解体，集出荷などの諸機能を統括して果たすことも可能である。こうした利益の蓄積にともない，これらの商人は時間と空間の格差を利用したうえで，不等価交換による超過利潤を獲得する。さらに商人は種畜，素畜，生産技術，経営資金などの提供をテコに，生産者に対する閉鎖的支配力を作り上げる。そこで，生産者は商人の価値増殖過程において，単なる雇用労働者という位置づけで商業資本の循環活動のなかに組み込まれる。

やがて，商人のこのような独占的市場支配は２つの方向から，社会問題を招いてしまうことに至る。１つは数多くの養豚生産者に対し，不当な利益収奪及び取引関係の独占による支配を実行することから，生産者の生活向上を妨害するのである。もう１つは，生産者を独占したうえで，豚肉の買占めないし協調価格の引き上げによる市場価格の釣り上げを行ない，消費者の安定生活を妨げるのである。いいかえれば，市場における不完全競争と不透明な価格形成が，私経済だけではなく社会経済までの正常な成長，発展を脅かすこととなる。そこで，国家は流通構造の近代化を図るために，それまで民間資本の活動に任せてきた豚肉の流通を，市場に関する法律の制定と公的卸売施設の設立などによって，透明度の高い完全競争市場へと転換しようとする。すなわち，豚肉の流通構造を政府の管理下に置き，具体的取引の場を公開し，「市場流通」への移行を図るものである。また，生産者と消費者は自己防衛の意味で，協同組合組織の結成と運動を通して，封建的，独占的な流通構造を掌握する商人に対抗しようとする動きも見られる。これらによって，豚肉市場における公開取引，公正価格，自由競争の実現が可能となる。

しかし，こういった国家の市場介入と生産者，消費者の組合結成にもかかわらず，市場規模の持続的拡大や社会の構造的変容につれ，豚肉の流通構造はまた大きな転換点を迎えざるをえない。都市の形成や拡大にともない，養豚産地の立地が近郊地域から遠隔地域になりつつあることは，新たな産地形成と流通構造の改革を促進する。そういう意味で，従来の流通構造の主たる担い手であった商人は，もはやその新しい変化に対応できなくなる。一方，豚を取扱う商業資本は多くの新規参入資本により，量的変化はもちろん，質的変化も進展する。とりわけ，生産者資本，飼料産業資本，小売資本，食肉加工資本の台頭は従来の商業資本の性格に多大な変化をもたらす。例えば，生産の自立性を確立した生産者は主体的行動をとり，自由に豚の買

い手を選ぶこともあれば，多数の生産者で結成された生産者組合が自らの力で豚の出荷，販売を担うこともある。また，川上に位置する飼料産業資本と，川下に位置する小売資本はそれぞれ，養豚生産の主な生産資材である飼料供給と豚肉商品の最終的な価値実現の機能を掌握することをもとに，豚の集出荷事業に進出することも少なくない。さらに，豚肉の付加価値を創出する食肉加工業者は，消費者の食肉消費形態の簡便化傾向に対応し，産業規模の急成長を成し遂げたことから，原料豚肉の安定確保がますます重要となり，自らも豚の集出荷に乗り出す。こうした大規模資本の進出により，豚を取扱う商業資本の性格は固有の独自性を有する商人から，単なる流通過程における手数料商人[15]へと転換される。

価格形成が一定の意味で公開，公正化されれば，商業資本の利潤は社会的総資本の平均利潤によって規定されるようになる[16]。そのため，豚を取扱う近代的商業資本は自由競争の市場構造のもとで，平均以上の利潤を蓄積しようとすれば，インテグレーションを推進することは必要となってくる。したがって，従来の家畜商人を中心とする商人資本に，豚の集出荷段階に進出を果たした生産者，飼料産業，小売業者，食肉加工産業の４者が加わり，５者の間に競争関係ないし提携関係は，豚肉市場の市場拡大と養豚インテグレーションの進展を促す。その結果として，豚肉流通構造における商業資本の規模格差の形成によって，完全な独占にはならないものの，少数の大資本による寡占的競争が市場を支配するようになる。こうしたインテグレーターの統合による流通過程の系列化が進行するにつれ，流通過程にかかる時間と費用の節約が強く推し進められる。また，激しい寡占的競争に対応するために，インテグレーターはすべての豚肉流通構造を系列内で完結しようとする統合戦略を打ち出し，豚肉流通構造の自らへの従属化を強制するものである。こういった統合戦略が進めば進むほど，インテグレーターは卸売市場を経由せずに，豚肉を調達することが可能となるので，流通構造全体に卸売市場の機能後退，市場外流通の拡大などの問題を及ぼす。

近年に至っては，物流技術の革新と国際貿易協定の農業部門への適用が，農産物の流通構造までに波紋を寄せる。すなわち，商業資本の私的経済だけではなく，国家の貿易政策の一環として組み込まれた農産物の流通構造は，国家経済からも規制を加えられる。豚肉の流通構造の場合は，自国内の範囲にとどまらず，多国に亙る広大な国際的流通構造に移行しつつある。そのなかで，とくに豚肉価格の内外格差を主たる原因に，豚肉は商業資本の手によって生産コストの安い国から高い国へと輸送されはじめる。輸入国の豚肉流通構造はいうまでもなく，輸出国のそれにも構造的再編がもたらされる。

2　現段階における豚肉流通構造の課題

前節で述べた豚肉の流通構造の再編成過程をふまえて，現在，流通構造の各段階における主な課題を指摘してみよう。

(1)　生産段階

社会の進展にともない，都市の形成や拡大は速いスピードで進む。その都市に様々な商業と産業が集まり，自然に農村の労働力を吸収する。こうして，農村労働力の都市への流出と産地の都市化への発展によって，生産担い手の不足と立地条件の悪化が生じる。そうなると，養豚農場はついに廃業か農場移転に追い込まれ，養豚戸数の減少を来している。生産者が生き残りを図るとすれば，協同組合または生産者グループに加入し，組織的支援と指導を受け入れるにより，巨大な寡占資本の産地進出に対抗し，安定な生産を続けるための有効な選択肢である。しかし，事業体でもある協同組合は組織自身の存続を図るために，「組織・事業の変質[17]」，「協同組合の企業化[18]」などの展開を示すなかにあって，その事業のあり方も組合員の要求に応えるとは限らない。

養豚の生産コストに比較的に大きなシェアを占める飼料を確保することは，養豚経営にとって重要な課題

15）商業資本における手数料商人化論については，三國英實「農産物市場における手数料商人化に関する一考察」『農業経済研究』日本農業経済学会，43巻１号，1971年，がある。

16）御園喜博「農産物市場と農産物価格形成」川村琢，湯沢誠，美土路達雄編前掲書，p 213。

17）三國英實「日本農業の再建と農協改革」鈴木文熹，中嶋信編『協同組合運動の転換』青木書店，1995，p138-148。

18）田中秀樹「協同組合の企業化と協同組合労働者」前掲書，p 162-163。

である。とくに飼料の自給率が低い場合，農場外からそれを調達しなければならぬ，生産コストはつねに高い水準にあるため，輸入穀物に頼らざるをえない生産者が多くなる。したがって，海外における穀物の生産状況や相場変動などは，国内の生産基盤さえを揺るがすこともありうる。

巨大な寡占資本の場合は，契約生産や直営生産を通じて生産部門に参入するが，飼養技術の改良による生産成果の向上，銘柄品種の生産による商品の差別化，経営の革新による生産費の低減などによって，独自の産地形成に力を入れている。さらに，安価な飼料と労働力の確保をねらって，インテグレーターは海外進出と開発輸入を促進し，国内産地に大きな打撃を与えつつある。

(2)　集出荷段階

従来の産地家畜商人による閉鎖的，封建的商流問題に代わり，遠隔産地から消費地までの物流システムの形成が問題とされはじめた。遠距離の輸送と消費地のニーズに対応するため，豚の集出荷方式は，庭先での零細な売り渡しから，出荷業者・生産者組合への委託出荷，あるいは生産者の自主出荷に変化してきた。そして，集出荷段階における豚の形態も冷凍輸送技術の発達にともない，それまでの生体から，産地でと畜，解体の処理を経た枝肉，部分肉へと転換される。さらに，インテグレーションの進展による流通構造の系列化が進む中に，産地に進出した商業資本は市場外流通を拡大し，独自の集出荷構造を確立したことが，他の集出荷担い手との競争を激化するだけではなく，全体の集出荷段階の不透明さを増しつつある。

(3)　と畜段階

と畜施設は国の介入と規制によって，衛生管理の向上が進められてきた。また，電気と畜施設とコールドチェーンの普及により，と畜施設での処理能力が大幅に高められたため，人工と畜は流通構造から淘汰されつつある。一方，インテグレーターも流通構造の系列化の一環として，と畜施設や食肉加工施設を設立する動きが見られる。同時に産地に進出し，集出荷事業ないし養豚事業に参入するインテグレーターの集荷能力に比べれば，国の管理下に置かれる公的と畜施設への集荷は保証されず，公的と畜施設の機能が低下する傾向にある。結果として，多額な投資が投下されたにもかかわらず，公的と畜施設の遊休化が発生し，多額な経営赤字を抱えるなど，その存在意義が問われてくる。

(4)　仲継階段

前述したように，インテグレーターの流通構造における系列化行動は市場外流通を激増するほかに，卸売市場での集荷能力の弱体化と市場機能の後退をもたらす。そのため，多数の卸売市場の取引頭数は減少し，主な収入源である取引手数料は激減を強いられる。市場経営の悪化にともない，統廃合による卸売市場の再編措置も取られつつある。こうした流通構造における寡占市場形態の確立による国の豚肉市場に対する管理能力の低下は，公正な価格形成体制の崩壊だけではなく，生産者及び消費者に対しても不利益をもたらす危険性がある。

(5)　分散階段

大規模小売資本の農産物小売市場への進出が始まったのは60年代であるが，豚肉をはじめとする食肉分野の小売市場への本格的な進出は70年代からである。それは，畜産物流通構造における前期的商人による古くからの商慣行の残存に依拠した食肉の専門小売店が依然として，小売市場の大半を占めたことが主因である。しかし，近代的性格に移行しても，新たな寡占支配体制を構築した商業資本によるインテグレーションの進展にともない，80年代以降の大型小売店舗の食肉小売シェアが顕著に伸びたばかりではなく，川上から川下までの流通構造系列化も急速に形成した。それにより，食肉の専門小売店は豚肉市場から排除される傾向にあることから，消費者との対面販売を通して，専門小売店側が素材や料理などに関する知恵を消費者に伝える，という役割は衰退せざるをえなくなっている。

寡占的市場のもとで，各インテグレーターは自らの絶対的優位性を維持するために，豚肉の輸入事業にも進出し，食肉加工向けのフローズン豚肉からテーブル消費向けのチルト豚肉までに輸入量を一段と増加してきた。また，近年に至って，海外からも豚肉の加工製品，調整品，惣菜製品の輸入を開始し，小売市場での品目多様化をもたらしている。こういったインテグレーターの行動は寡占的競争に対応するために，当然，いずれもそれぞれの系列内で行なわれ，消費者にも公開されていないが，海外産地での生産過程や衛生状況が十分管理できないこともあり，食品の安全性を重視する消費者の不信感を募らせている。

産直運動を基本とする生産者組合と消費者組合との提携による組合間協同が，生産者組合のと畜段階への

進出をきっかけに，豚肉の分散段階までに広がってきた。ところが，生産者組合の広域合併と系統再編，消費者組合の事業拡大にともなう遠距離調達の進展は，本来の産直運動を歪める方向に推し進めていることから，そのあり方も問われている。

Ⅳ おわりに

農業は商品経済の成立よりもはるか以前から存在したが，社会的分業の進展と農業生産力の高まりのもとで，農産物の商品化が進み，農業生産は工業生産を主とする資本主義的生産様式に包摂されることを余儀なくされた。そして，産業資本の循環運動のなかにも組み込まれるところとなった。いいかえれば，農産物の流通構造は資本主義の再生産構造のなかに位置づけられることとなった。また，工業製品の場合と同じように，こうした商品としての農産物の効率的な流通を図る意味で，その流通過程に仲立ちし，社会的分業の一環としての農産物を取扱う商業資本も成立するのである。しかし，たとえ農業生産は資本主義的生産様式に包摂されたとしても，工業生産の資本循環に見られる現象が，農業生産にも完全に通用するとは限らない。それは工業の生産過程と商品に対照して，農業生産と農産物は明らかな特質を有しているからである。農業の生産過程の特質としては，土地と天候への依存性，生産の長期性と小規模性，労資混合性などがあり，農産物の特質としては，自然腐敗性，流通過程での質的・量的可変性，生産量と品質の不安定性，消費者にとっての不可欠性などがある。こうした農業生産と農産物商品の特質は，農産物の流通にも特殊な性格を与える。

農業生産のなかでも，畜産部門は他の農産物との相違から，畜産物の流通構造は以下の要因に規定される。すなわち，第1に，生産物の規格化及び標準化の不可欠性である，第2に，農産物でもある飼料に大きく依存する迂廻生産型の農業である，第3に，消費されるための整形加工と分割販売を必要とする，第4に，長い生産周期による経営資金調達の困難である，第5に，ふん尿処理にかかる費用は生産コストを増加する，などである。したがって，畜産物を取扱う商業資本が流通構造において果たす諸機能のうち，資金供与，整形加工，保管の3つの機能が全体の畜産物の再生産循環に占める寄与度は，他の農産物に比べても重要な位置にある。とりわけ，畜産物の流通にとってなくてはならない整形加工は，流通過程の中枢的地位を占めていることから，単に付随的機能として位置づけるべきではない。また，畜産物の流通構造におけるこれらの規制要因を見れば，他の農産物よりも畜産物のインテグレーションがとくに進展した原因も理解できる。

畜産物のなかにおいても品目間に大きな差異は存在し，それぞれの流通構造の特殊性を形成しているため，種類別に畜産物の流通構造を分析しなければならないが，本研究では中型家畜の位置にある豚肉の流通構造を対象に取り上げることにした。

社会的分業のもとで，商品実現のために，豚はまず生体の形で生産者の畜舎から家畜商人の手元へ搬出される。そして，食肉として消費者に利用されうるために，豚は家畜商人から専業化した整形加工の加工業者を通して，分割販売を行なう小売商人へと順次渡される。生産者はこれらの流通機能を分担する商人を媒介にして，はじめて消費者と結びついたのである。こういった流れを生産，集出荷，と畜，仲継，分散の5つの段階に整理することができ，この5つの段階によって豚肉流通構造が構成される，ということもできる。

ところで，これらの商人資本は豚肉生産力の低い段階では，不等価交換により，価値増殖を追求した。商人は多段階にまたがって複数の機能を掌握することによって，取扱規模の拡大，取引と情報の独占，生産者への支配などを行ない，独占的市場支配を築き上げた。しかし，こうした独占的市場のもとに生じた不完全競争と不透明な価格形成は，私経済及び社会経済の発展を脅かすようになった。これに対応するために，国家の市場介入，生産者と消費者の組合結成がなされた結果，豚肉市場には公開取引，公正価格，自由競争が導入された。こうして，商業資本の有していた前期的性格は近代的性格へと移行を余儀なくされた。

にもかかわらず，社会的総資本の平均利潤を上回る超過利潤の獲得を目指す商業資本は，養豚インテグレーションを推進しはじめ，いわゆるインテグレーターとして豚肉の流通過程の統合化を試みている。このようにして，豚肉流通構造においては少数の大規模資本による寡占的競争が市場を支配するようになり，国家の近代化政策のもとで作られた卸売市場制度に機能後退をもたらしている。さらに豚肉価格の内外格差を利用し，価値増殖を強化するため，割安な外国産豚肉を輸入しはじめた。こうして，豚肉の流通構造は統合化・国際化の方向に再編を強いられている。

このような豚肉の流通構造の再編過程をふまえて，今日，その流通構造が直面している主要な課題を以下のように整理できる。すなわち，第1の生産基盤の脆弱化，第2の集出荷の不透明化，第3の公的と畜施設の遊休化，第4の卸売市場の機能後退，第5の小売の秩序喪失，などである。これらの問題はいずれも商業資本とは深く関連しているといえる。したがって，今後，豚肉の流通構造の展開と再編に関する実証研究を進んでゆくには，商業資本に対する深層的な考察は重要である。

The Formation of Livestock Marketing System and its Re-organization: Viewpoint on Pork Sector.

Ryon-guan OANG and Hidemi MIKUNI

Faculty of Applied Biological Science, Hiroshima University
Higashi Hiroshima 739, Japan

Agriculture nowadays tends to be subsumed by the producing models, which have grown rapidly under the capitalism. For the characteristics of producing process and products, the role of commercial capital is very important to the commercialization activities of agricultural products. Furthermore, in the section of agricultural production, the marketing system of livestock seems to be regulated by some factors, which are different from other agricultural products. Consequently, these factors make the functions of commercial capital; especially shaping, storage, and financing to be particularly necessary for maintaining livestock producing cycle, and have great influence on the marketing system. While observing the marketing system with a viewpoint on pork, it could be found out that the system is composed of five divisions, i.e. breeding, shipment, slaughtering, intermediating and retailing.

In early stage, commercial capital ruled the pork market by controlling these stages. In order to adjust the market to an open and a fair one, the modernization of pork market is promoted mainly by nation's policies, cooperative activities of farmers and consumers. But the high development of livestock processing industry and integrated management, which are operated by a few large capitalists afterwards, has brought oligopoly competition to pork market and try to reorganize the market system by it's own ways. Accordingly, the prime problems of present stage are: (a) losing of farm potential, (b) unclearness of shipment structure, (c) low running of public slaughter-house and wholesale market, (d) disorder of retail market, which needs be solved pressingly.

Keyword: capitalism, circuit of capital, realization of value, commercial capital, roundabout production, shaping.